

(都道府県 徳島県)

I. 学校の概要 (平成15年4月現在 実施計画書から転載)

国立鳴門教育大学学校教育学部附属小学校 (フロンティアスクール名)										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	総数	計	教員数	
学級数	3	3	3	3	3	3	0	18	32	
児童数	119	115	115	112	111	116	0	688	非(7)	

II. 実践研究の概要

1. 主題 (テーマ)

よりよい生き方を見つめる子どもが育つ授業の創造

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科 (選択した理由)

3年生 算数科 (理解度や習熟度において、他教科と比較して特に個人差が出やすいため。また、本校では、第3学年と第4学年との間に発達の隔たりがあると考えているので、その隔たりのある前学年にあたるため。)

5・6年生 国語科・算数科 (学校として従来からとってきた教科担任制において、児童の理解度や習熟度を検証するため。)

(2) 年次計画

① 平成14年度

○テーマ

よりよい生き方を見つめる子どもが育つ授業の創造
— 生活的な学びを通し、確かな学力をはぐくむ学習過程を求めて —

○仮説

子ども一人一人の生活に根ざした課題から単元を構想し、生活と密着させて学習活動 (生活的な学び) を展開していく。その展開に、構え・自主・協同・発展という学習過程を取り入れた授業を進める。そうすることによって、子ども一人一人に確かな学力をはぐくみ、よりよい生き方を見つめる子どもを育てることができるであろう。

○研究内容・方法

- (1) 生活的な学びを創る単元構想と展開のあり方
- (2) 構え・自主・協同・発展という学習過程あり方
- (3) 子どもの理解度や習熟度に応じた指導のあり方
- (4) 小学校教育における教科担任制のあり方

② 平成15年度

○テーマ

よりよい生き方を見つめる子どもが育つ授業の創造
— 「豊かな心」と「確かな学力」を同時に育成するために —

○仮説

各教科等には、どのような特質があるのかを子どもの立場からも検証し、そこで付けるべき資質・能力 (確かな学力) をより明確化していく。そして、「豊かな心」をベースとしてはぐくんでいくとともに、「確かな学力」を同時に身に付けていくようにすれば、よりよい生き方を見つめる子どもが育つであろう。

○研究内容・方法

- (1) 「豊かな心」と「確かな学力」を同時に育成するための授業のあり方
- (2) 各教科等における資質・能力を付けるべき授業のあり方
- (3) 子どもの理解度や習熟度に応じた指導のあり方
- (4) 小学校教育における教科担任制のあり方

③ 平成16年度

○テーマ

よりよい生き方を見つめる子どもが育つ授業の創造
— 一人一人を生かす授業の構築と評価 —

○仮説

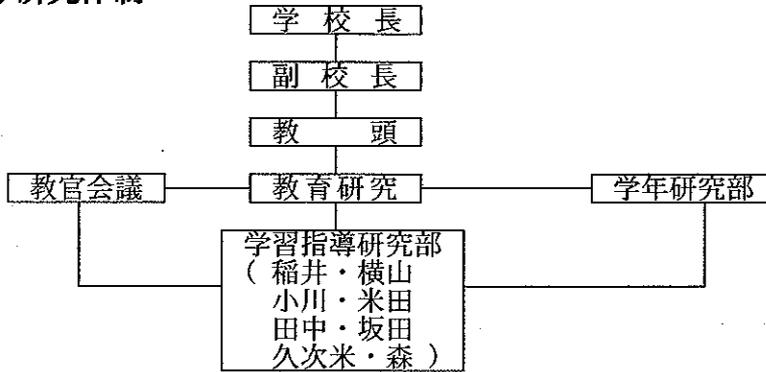
目標を達成するために子どもを見据えて教材を開発していく。そして、その教材を生かす授業を構築していく。また、子ども一人一人を適切に評価し、

それを指導と一体化させていく。こうすることによって、よりよい生き方を
みつめる子どもが育つであろう。

○研究内容・方法

- (1) 目標を達成するための教材開発
- (2) 教材の独自性を生かした単元・授業と評価
- (3) 子どもの理解度や習熟度に応じた指導のあり方
- (4) 小学校教育における教科担任制のあり方

(3) 研究体制



Ⅲ. 平成15年度の成果及び課題
第3学年「算数科」における実践について

(1) 本年度の取り組みについて

昨年度に引き続いて、第3学年の算数科において発展的・補足的な指導の充実に向けての研究に取り組んできた。本年度の本学年の子どもたちも、基礎的・基本的な学習内容についてはおおむね理解することができていたため、課題選択による少人数指導を行うことにした。

指導方法としては、昨年度と同様に単元の最後の時間に「チャレンジタイム」を設定し、単元のまとめと発展学習を行うことにした。まず、昨年度の最終的な学習形態を継承することからはじめ、気付いた点を改良していくことにした。そのため、1年を通してチャレンジタイムを行う過程で、少しずつ学習形態が変化していくことになった。ただ、いくつか設定されたコースを選択するのは子ども自身であることと、授業を実施する単位は単学級であるということに変えなかった。

チャレンジタイムを実施した単元は「九九の表とかけ算」「わり算」「足し算と引き算の筆算」「あまりのあるわり算」「かけ算の筆算(1)」「はこづくり」の計6回である。研究内容は次の3点である。

- ① 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための教材の開発
- ② 個に応じた指導のための指導方法・指導形態の工夫改善
- ③ 児童の学力の評価を生かした指導の改善

(2) 実践例

「かけ算の筆算(1)」についての実践例を述べる。

〈実施するにあたって〉

回数を重ねることで、子どもたちはずいぶんとチャレンジタイムの形態に慣れ、コース別学習の意味をよく理解することができるようになっていたが、各自がより自身に合ったコースを選択することができるようにするために、事前に各コースの問題内容や意味についての指導を行う時間をこれまでより長くとるようにした。

また、子どもが事前に選択したコースを学級担任の教師とTT担当教師がチェックし、適切なコースが選択できているかどうかをみるとともに、コースを変更した方がよいと判断される子どもについては個別にアドバイスを行うことにした。ただし、コースの変更を強いるのではなく、あくまでも本人の希望を尊重するように配慮するようにした。

〈課題の制作〉

今回は4つのコースを設定し、A・Bコースは基礎学力の定着をはかるコース、C・Dコースは発展学習と位置付けた。

Aコースは筆算の解き方、考え方を確認することを目的とし、Bコースは筆算の計算が速く、正確に解けることを目的とした問題を考えた。

Cコースは虫食い算をもとにした問題である。パズル的な要素も含ませることで、解くことの喜びとともに、考えることの楽しさを味わうことができればという願いもこめられている。

Dコースは数学的な思考力を養うことができる問題であり、同時に筆算の計算の練習にもなるようになってきている。深く考えなくても問題を解くことができるが、発想を変えることで新たな解き方が見えてくるので、そこに気付いていけば発見の喜びや考える楽しさを感じることが出できののではないかと考えて問題を設定した。

〈指導方法〉

校舎の改修に伴い、3年生は11月から体育館を3つに仕切って教室代わりにし、日々の生活を送っていた。教室の後ろに広いスペースがあり、そこを有効に活用した授業が行われていた。今回のチャレンジタイムでは、その環境を生かして机等の配置を行うことにした。

A・BコースとC・Dコースの間にスペースをとり、授業の初めと終わりの全体でのまとめをここで رفتたり、それぞれのコースで集まって話し合いをするときに使用したりするなどできるようにした。

CコースとDコースは向きをずらして、それぞれのコースでの活動に集中できるように配慮した。また、ヒントカードを用意し、自由に取られるようにした。

〈学習の流れ〉

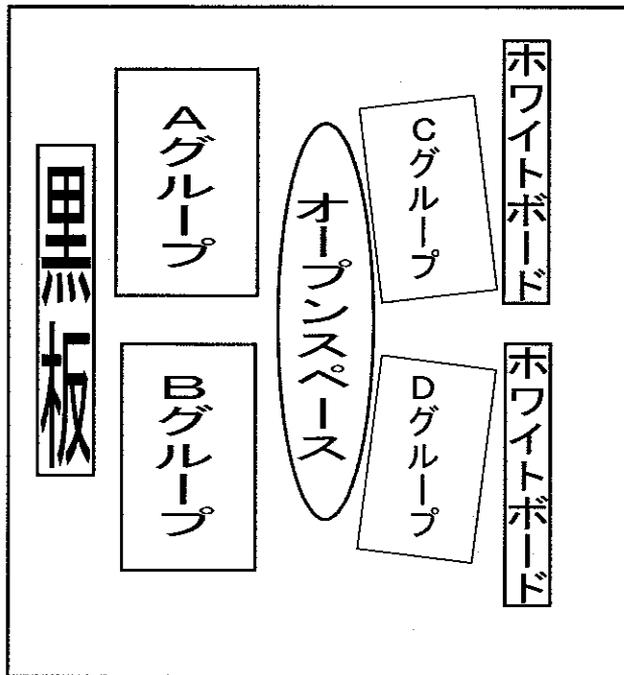
これまででは最初に選択したコースが終了したら、他のコースへ移っていったのだが、今回からは初めから終わるまで1つのコースの学習を行うようにした。そのため、子どもは途中で席を移動することなく、学習がスムーズに進んでいくようになった。

まず、初めにオープンスペースに全員が集まり、この時間に自分たちがどのような学習を行うかを確認し、その後、それぞれのコースに分かれて活動に入った。

A・Bコースではどんどんプリントを解いていく形態であるので、指導者は主に机間指導を行うことになった。また、何人かが同じ内容の問題でつまっている場合には、板書を中心にして解き方の説明を行った。

C・Dコースでは指導者が2つのコースを行ったり来たりしながら、時間差で解説や机間指導を行うことになった。各コース2つの問題があったため、どちらも2回ずつ自主学習の時間と協同学習の時間があった。

授業の終わりにもう一度全員でオープンスペースに集まり、学習を終えて気付いたことや考えたことなどを発表し合い、まとめを行った。



(3) 成果と課題

多くのコースを選択することができるようにすることで、子どものニーズに対応しやすくなり、1人1人に対するきめ細やかな指導が可能となるとともに、子どもが自ら学ぼうと意欲的に学習に取り組むことができるようになっていった。また、子ども自身が課題を選択するという能力も伸ばすことができた。

発展的な課題においては、ただ問題を解くのではなく、学習したことをもとに自ら問題を作って友達を解き合うなどの活動を取り入れた。これにより、他とのかかわりの中で共に高め合う雰囲気は自然と生まれてきた。

課題としては、主に単元のまとめとしてチャレンジタイムを行っていたので、単元の途中や導入の部分で同様の形態で授業を行った場合や、一つの単元で複数回チャレンジタイムを行うとどのような効果があるかははっきりとはしていない。

また、今年度は昨年の研究に引き続いて単学級における少人数制授業の形態を考察していったので、今後は複数のクラスや学年合同の課題選択学習や少人数指導についての実践を行う必要があると考えられる。

2. 第5・6学年「教科担任制」における調査について

○調査の概要

本校では、従来より第5・6学年において、教科担任制を採ってきている。そこで、教科担任制の効果と課題を明らかにするために、児童並びに保護者を対象にして、平成15年11月に、「教科担任制」についての意識調査を実施した。

(1) 児童について

○効果

- ① 分かりやすい授業が増えた【5年生】
4年生まで、担任がほとんどの教科を教えていたので、5年生になり専門的に指導されることにより、得意な教科、よく分かる教科が増えている。それは問1の授業が分かりやすいという児童が増えた(62%)。指導者側から考えても、子どもの意識に沿った単元の構成を考えたり、ワークシートを作成したりするなどの教材研究の時間を十分とることができるからであろう。
また、問1の分かりやすい授業が減ったという児童が6%いる。これは教科の内容自体が難しくなっていることも考えられると予測される。
ことから推測される。
- ② 得意な教科・楽しみな教科が増えた【5年生】
4年生までと比べて、得意な教科・楽しみにしている教科が増えた児童が、73%いる。問1の結果と合わせて考えると、授業が分かりやすいということが、得意な教科になったり楽しみになったりすることにつながっていくのであろう。
一方、教科担任制になって、得意な教科・楽しみにしている教科は変わらないと答えた児童は、約三分の一である。
得意・楽しみになった教科については、特に顕著なものはないが、各教科ともに30~40%の数字がでていることから、どの教科も教科担任制が楽しみであるといえるのではないか。
- ③ 教科担任制により、次のような効果が生まれた。【5・6年生】
5年生では、「いろいろな先生に出会う」と答えた児童が8割(111名中91名)、「新たな気分で授業を受ける」が7割(111名中78名)いる。これは、同じ指導者がほとんどの教科の授業を行うと、緊張感が持続しにくい、教科担任制では教室の雰囲気もかわり、毎時間気持ちを新たに授業に臨めるからであろう。
6年生では、「教科の力がしっかりと身につく」と答えた児童が84%(116名中97名)、「いろいろな先生に出会う」と答えた児童が116名中81名)いる。これは、5年生同様、毎時間新鮮な気持ちで授業に望めるとともに、子どもたち自身が教科の力を身につけようという意識をもって、じっくり学習に取り組め、力がついたということであろう。

○課題

- ① 家庭での課題が多くなった。【5・6年生】
5年生では、「宿題が重なって大変」ということがある(11名)。それぞれの教科担任が、他の教科をあまり気にせず宿題を出しているという現実があるのであろう。今後、各担任が連携を密にする必要がある。
6年生では、「宿題が重なって大変」63%(116名中73名)ということがある。
5年生にくらべ数が多いのは、教科担任制というだけでなく、6学年という学年の特質も大きく数字に影響していると考えられる。

(2) 保護者について

○効果

- ① 分かりやすい授業が増えた【5年生】
分約6割の保護者が、教科担任制の導入による効果として、授業が分かりやすくなったと答えている。これは、指導者側から考えると、教科担任制の導入により、指導者が専門的知識・技能に精通し、授業の質が向上していることが要因であると考えられる。また、保護者が授業の質を評価する際、教科担任制の導入による効果として、授業が分かりやすくなったと答えている。これは、指導者側から考えると、教科担任制の導入により、指導者が専門的知識・技能に精通し、授業の質が向上していることが要因であると考えられる。
- ② 得意な教科・楽しみな教科が増えた【5年生】
保護者が、約6割いる。①の結果と比べると、保護者の意見が、教科担任制の導入による効果として、授業が分かりやすくなったと答えている。これは、指導者側から考えると、教科担任制の導入により、指導者が専門的知識・技能に精通し、授業の質が向上していることが要因であると考えられる。
- ③ ア 5年生では、8割以上の保護者が教科担任制に賛成している。その理由として、「各教師が専門的知識・技能に精通している」「クワラが得る」「授業の質が向上している」と答えている。これは、指導者側から考えると、教科担任制の導入により、指導者が専門的知識・技能に精通し、授業の質が向上していることが要因であると考えられる。
- イ 5・6学年と、人間の幅が広がる。【5・6年生】
「毎時間新鮮な気持ちで授業に臨める。」

と肯定的にとらえていると考えられる。

○課題

- ①児童理解の機会が少なくなるという懸念がある。
「クラスを1日中みることによってクラスの課題が見えてくる。」「担任に幅広く子どもをみてもらいたい。」「宿題が多い。」などがあげられているが、この点は、各クラスの担任が、十分な連携を図り、それぞれの子の特性や指導の方針を共通理解することで、解決できる問題であろう。そのための具体的な解決策を考えていく必要がある。

IV. 学力把握のための学校の取組について

定期的な学力調査の実施（第3学年は年6回、第5学年は8回）

V. フロントィアスクールとしての成果の普及について

○研究会、説明会等の開催実績

毎年1回、授業研究会と小学校教育研究会をそれぞれ開催している。

○次回開催予定

日時：平成16年6月4日（金）【授業研究会】・平成17年2月【小学校教育研究会】

場所：鳴門教育大学学校教育学部附属小学校

テーマ：よりよい生き方を見つめる子どもが育つ授業の創造

対象：小学校教員ほか

参加方法：当日受付

○HP作成等の工夫の実績及び今後の予定

本校のホームページを作成し、幅広く研究内容や方法について理解していただけるように工夫している。（<http://www.elesch.naruto-u.ac.jp/>）

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数指導 T、Tによる指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無